

『スポーツ統計「大相撲春場所」』

東京市統計課 [編]

1931年1月 / 27cm / 39頁 / 図書番号 OMZ-0938

東京市統計課は、スポーツがどの程度まで市民生活の中に織り込まれているかを科学的に分析するスポーツ統計を計画した。1929年10月に明治神宮外苑競技場で開催された日独対抗陸上競技大会の調査が、その第1回である。翌1930年1月にも、同競技場で開催された京都帝国大学対明治大学のラグビー戦で調査を行った。

本調査は、その第3回に当たり、大相撲春場所10日目(1931年1月17日)を迎えた両国国技館において実施された。調査は、入場者に調査票を手渡して観覧中に随時記入してもらい、後ほど調査員がこれを回収した。総観覧者数の約70%に当たる7,515人から回答を得た。

これをもとに、相撲が市民のどの階級に愛好されているか、また外来競技である陸上競技やラグビーの観客と相撲の観客の間に明らかな違いがあるか等を分析している。

観客の性別については、男性が約94%に対して女性が約6%であった。スポーツの女性観客はまだ極めて少なかったが、陸上競技(約7%)、ラグビー(約8%)に比べても、なお低い結果であった。

観客の年齢階級中最大多数を占めたのは26~30歳階級で、全体の約16%であった。陸上競技・ラグビーでは最大多数が20~25歳階級で、その割合が30%以上であることと比較すると、ひとつの特異性が見られる。

外来競技の多くが学生層を中心として大衆を把握しつつあるのに比べ、相撲は伝統的強みと言うべく、いずれの年齢階級にも普遍的に理解と興味を与えるため、観客の年齢構成が平均的になると推測できるとしている。

職業については、最も多かったのは商人の約25%であり、学生が約半数を占める陸上競技・ラグビーの観客層とは趣が異なる。これをもって、直ちに相撲が民衆的スポーツであると速断はできないが、少なくともその伝統ゆえに、相撲に対する理解と興味が国民一般に普及していることは事実であろう。

ただし、この結果は1日のみの調査によるものであり、各種スポーツを指示する職業層の具体的輪郭やその傾向を知るためには、さらに調査を重ねる必要があるとする。

住所は、今回新たに調査された項目である。場所柄にもよるとみられるが、東京市内居住者と東京府下居住者で全体の90%以上を占める。しかし、他府県居住者(約8%)の中には、相撲見物のためにわざわざ上京したと思われる熱心なファンも相当見受けられる。

最後に、利用交通機関については、最も利用が多かったのは自動車の約42%であり、市電の約33%がこれに続く。陸上競技・ラグビーでは省線(鉄道省が経営する汽車または電車)利用者が全体の約半数であったが、これは競技場が省線の駅に近いためである。自動車利用が多い理由として、まず場所柄、省線の利用が不便なためであり、一方で観客に商人、会社員、官公吏が比較的多いため、料金の割高な自動車利用率が高くなったのではないかと分析している。

なお、スポーツ統計はこの後も続けられ、水上競技、野球、拳闘等について調査が行われた。

(山野辺香葉・市政専門図書館司書主任)